

大先生のためになる話 最終回

あっという間の1年間だったねえ。そうは思わないかい。

この1年間で成長したのだろうか。

この時間は常に自分でものを考える時間であるといいながら、ここまできたのだけれども、時にはどうも通じてないなあということがたくさんあった。それはややこしいこと、難しいことを言ったせいもあったけど、単純なことでも、一度や二度言ったくらいでは全く人の心なんて変わるものではないとつくづく感じた。

最近読んだ『ひきこもる小さな哲学者たちへ』（小柳晴生、日本放送出版協会、生活人新書、2002）という本は次のような前書きで始まっている。

「大人と子どもとの間には、容易に越えられないほど深い溝ができています。それは、世界観や生き方の違いに由来しているために、相互にわかりあうことがきわめて難しいのです。この溝は、社会が急激に豊かになったことで生じました。

人類が始まって以来つい最近まで、生きることは欠乏との戦いでした。欠乏を生きることは苦しいものです。ほしいものが容易に手に入らないばかりか、時には生命の危機にさらされるからです。

近年のめざましい科学や工業の発展で、私たちは欠乏の苦しさからは解放されつつあります。しかし、それに変わってものや情報の洪水のような奔流に放り込まれたのです。そこで直面したのは「豊かさを生きる難しさ」でした。たくさんの選択肢から、自分が本当に求めているもの、必要なもの、満足をもたらすものを見抜き、選び取りながら泳ぎ渡らなければならないからです。

いま、子どもたちや若者は土砂降りともいえるほどの批判にさらされています。「耐える力がなくなった」、「キレやすくなった」、「子どもの世界に陰湿ないじめが深く広くはびこっている」、「対人関係が下手になった」、「小さい頃から善悪がしつけられていない」などです。これらの多くは、実際に子どもたちや若者が悪くなっているのではなく、世代間の理解を成り立たせないほどの大きな溝によって作り出されていると考えられます。

大人から子どもたちへの批判や、最近の子どもたちはわかりにくいという言説は、これまで疑いようのないほど常識であった「欠乏を生きる知恵」と、最近急速に必要性を増し広がりつつある「豊かさを生きる知恵」との間に生じている軋轢であり、適応の仕方の違いが生み出しているのです。

（中略）

豊かな時代というのは、日々の食卓が、「食べても食べても減らないバイキング料理」のようなものです。あり余るほどの料理に囲まれながら、食べた実感もなく、食べたいものがないのです。それでいて飢餓感にさいなまれるという生き地獄のようなものです。

あるいは「巨大なテレビショッピングの世界」に放り込まれたともいえます。テレビで15分ごとに流されるおびただしコマーシャルがその象徴です。全く相互に関連のない商品の映像が絶え間なく流れ、あらゆる欲望がささやきかけてくる「誘惑の地雷原」を歩き続けることになるのです。」

ということで、この本の引用が長くなったが、著者は「豊かさを生きることの難しさ」を読み解く鍵を提示しようとしている。この本の話はこれくらいにするが、世代間の溝なんてものについては、なるほどそうだよなあ、と改めて感じた次第。

自分が中1の頃をふり返ってみると、自分の家には自家用車はないし、カラーテレビもないし、家の

前は舗装してないし、ミニコンポどころか、自分のラジオさえもなかった。もちろんカセットテープがようやく登場し、カセットテープレコーダーを持ってる友達なんてクラスに1人いるかないかだった。1個10円のコロッケがごちそうで、その肉屋で2月に1回くらいコロッケの代わりに鳥の手羽先を揚げたやつ（これが1つ100円もした）を食べるとすごく幸せだった。ファストフードの店なんてあるはずもなく、外食するなどということはまず考えられなかった。外で食べるといえば大和デパート（当時8階建てで、金沢では一番高いビルだった）の食堂で食べるのが何ともはやぜいたくだった。そんな45歳にもなろうというおじさんが、貧しいがゆえの幸せを説いたって通じるわけがないよな。これからの価値観が変わっている時代には、まさしく新しい生き方が必要になっている。

それを見つけ出し、そして、幸せとは何なのかを考えるのが君たちの仕事なのだ。

しかし、それでも、こちらとしては基本的と思えることがどうも通じない。

たとえば、ゴミが落ちていたら拾うとか、チョークが落ちていたら、踏まないようにするとか、自分のものに名前を書くとか、ほんとにできないよなあ。

掃除なんてばかばかしくってやってられないという感じだし。

普遍の原理である「人のものを取ってはいけない」でさえもが、やはり時代の違いを感じさせることがある。昔はひもじくて、食べるものがなくて食べ物を万引きする子どもはいた。今は時としてゲームである。いやしかし、「誘惑の地雷原」の中に踏み入れているのかもしれない。衣食満ち足りて、あとはマンガにゲームをひたすら集めているのかもしれない。

こんな時代に誰がしたって、そりゃ大人だろうけどね。

確かにタバコの吸い殻は道のどこにでもポイポイ捨てるアホな大人は山ほどいるし、車の窓からゴミや空き缶を投げ捨てるバカな大人は山ほどいるし、人のことを考えられない大人も掃いて捨てるほどいる。我が子でさえ虐待して殺してしまう、どうしようもない大人でさえいる。

そんなのって、きっと子どもにはちゃんとうつつてるんだろうね。

と書けば書くほど愚痴になるのがこの学級通信なのであった。

私の知人の教員のことばにこういうのがある。

「担任がしっかりしていて、指示を待つクラス、担任が頼りなく、生徒が自治の力を発揮するクラス。さてどっちがいいと思いますか？」

みなさんはどっちでしょう？この1年6組はどうだったのでしょうか？

なに？担任がアホで、されど生徒も自治の力を発揮していないって？

これは最悪のクラスですね。

一番いいのは担任がしっかりしていて、それに輪をかけて生徒が自治の力を発揮するクラスでしょうが、担任がアホでも生徒が何か考えるクラスの方が、指示待ちのクラスよりはいいかなと思う春、今日この頃なのであった。

一応自分をヨイショしておいて、このあたりで大先生のためになる話は終わろう。

そういえば、ネタは尽きない。前にちょっとプライドの話をしたのだが、ほんと人間てプライドの生き物だね。ちょっとみんなに怒っただけ、叱っただけでの反発はすごかった。そう前読んであげただろ。「自分で自分のことをアホというのは許せるが、自分がアホでも、人にアホと言われると許せない。」というやつ。

これは勢古浩爾『こういう男になりたい』（筑摩書房、ちくま新書、2000）の中にあつた内容だ。

この本もまたおもしろい。紹介したい箇所は山ほどあるし、その中に出てくる本にもたくさん紹介したいところがある。だがもう紙数は尽きる。だから最後に一つだけ言うておこう。

「これから10年後が勝負だね。いったいどっちがいきいきと生きてるか。いったいどっちが若々しく生きてるか。そして、いったいどっちが幸せだと言って生きてるか。」